
K I S H I D A I A No.43 目 次

台湾クモ類採集旅行	吉田 哉	1
ビジョオニグモのフ化に接して	佐藤 幸子	6
クモ標本観察のための一用材	松本 誠治	9

— DRAGLINE —

アズチグモの食餌	小野 展嗣	10
石垣島で採集したサヤヒメグモ	吉田 哉	10
イマダテテングヌカグモの採集記録	熊田 憲一	10
アシナガグモ科2種の卵のうを確認	鈴木 勝浩	11

クモ学会 1977年 10大ニュース	運営委員会選	12
--------------------------	--------	----

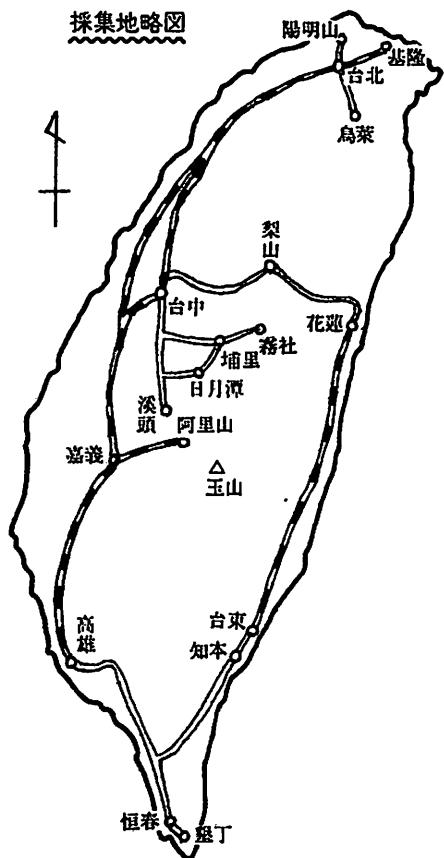
観察会報告 1977年夏～1978年春

八王子城跡のクモ (I)	新海・田中・栗原・高橋	15
--------------------	-------------	----

編集後記		24
------------	--	----

台湾クモ類採集旅行

吉田 哉



台湾のクモ類の研究の多くは日本人の手によってなされ、これまで報告がなされている。しかし、台湾からの記録のはほとんどは、日本産の種と同じものであり、南方系の種に関する文献は調べられておらず、未知種はとり残されているというのが現状である。こういった種を解決してみたいというのが私の希望である。以前から台湾へ採集に行きたいと思っていたが、吉村守氏から仲間といっしょに行こうという話があり、私も行くことになった。途中、沖縄で採集してから行くということと、交通費の一番安い方法として船を使うことになった。

台湾に第一歩

1977年7月2日夕方石垣港を出港、手続きは全く簡単で荷物の検査などではなく、「出国」というスタンプをパスポートに押してもらっただけで済んだ。翌朝、台湾最大の港である基隆（キーレン）に着く。基隆港ターミナルに下船。税関の検査がある。皆英語で話していて最初は面くらった。こんなことは旅行案内には書いてなかった。採集道具の説明などは少々困った。基隆港ターミナルと基隆駅は歩いて2分程の所にあり、基隆駅から快車（急行）で台北（タイペイ）まで行く。この日は台北市内をぶらつきながら、次の日からの採集について思いをめぐらした。

台湾には大飯店や賓館と呼ばれる高級ホテルと、旅社という一般ホテルがある。大飯店などは日本のホテルと同様に値段も高い。しかし、旅社というのはとても安い。1泊で100元（台幣1元は日本円7円ぐらい）以下である。台北市内では台北裏駅の付近に多く、これらの所ではいつ行つても泊れる。

烏来

4日朝、台北駅の前にある公路局バスターミナル西駅から烏来（ウーライ）行のバスに乗る。1時間ほどして烏来に着く。台湾のバスは皆車掌が乗っているが、途中の案内などは全くしてくれない。終点まで行く場合には問題ないが、途中下車する場合には困る。停留所の表示を注意して見て

KISHIDAIA No.43, 1978, Jul 1

いくか、最初から車掌に頼んでおくしかない。

烏来は台北の近くで唯一の高砂族の部落があり、観光地としてまた昆虫採集地として有名である。ここでは日本人に会うことも多く、店などではほとんど日本語が通じる。一般に台湾では日本語が通じるが、都市より田舎の方がより理解されるようである。台湾に来て最初に採集したのがヒザブトヒメグモであった。つり鐘状の住居を作っているが、台湾で採集したものはすべて本種であった。観光地となっている付近は採集地としてはあまり良いとは言えない。黄新來さんという現地の蝶採集人と知り合うことができ、亀山の付近と烏来から少し山に登った所へ行くことができた。ここでオオスミコガネグモとコケオニグモを採集することができた。これには自分ながら驚いた。こんなクモが台湾にいようとは思っても見なかつた。オオジョロウグモはどこにでも見られる全くの普通種である。ミツカドオニグモは日陰に割合多くいるようである。ドヨウグモの一種は溪流上に網を張っている。メガネドヨウグモに似ているが別種のようだ。また、水辺にはカイゾクコモリグモの一種が多く見られた。ジョウグモの一種雌雄も採集することができた。台湾から*Macrothele* 属としてホルストジョウグモとヒラジョウグモが記録されているが、いずれとも同定しがたい。台湾のジョウグモについてはいろいろ疑問を持っている。原記載においてホルストジョウグモが雄、ヒラジョウグモが雌を用いている点などこれらを含めて検討が必要だと思う。ここに3泊して台北にもどる。

阿里山

9日朝7時30分発の対号特快という特急の中で一番安い列車で台北から嘉義（チアイ）へ向う。車内ではお茶のサービスがある。しかし、冷房などはついていない。値段が安いからしかたがないのだろう。嘉義に少し遅れて到着、同じホームに阿里山（アリサン）鉄道の中興号が止っているのですぐ乗り込む。結局ずっと立って阿里山まで行くことになる。嘉義では暑くてしかたがないくらいだったが、少しずつ涼しくなって行く。阿里山では逆に寒いくらいである。標高2000mともなると南国でも寒いものである。一帯は吉野杉・紅桧の植林になっていて、あまり良い採集地とは言えない。ここで初めてボロアミグモをとる。1mぐらいの棚網で、ぶら下るように占座している。ほかでも多く採集できた。ボロアミグモは*Psechrus torvus* が台湾産のものの学名として用いられているが、これとは別のものであろう。体長2cmという大型の篩板類である。ほかにはサラグモ類が多くとれた。さすがに高山で、オオジョロウグモは全く見ることができなかつた。

墾丁公園

阿里山2泊、嘉義1泊後嘉義から高雄（カオション）まではSLの引く普通列車で南下する。台湾では普通列車や貨物列車にSLがまだ活躍している。高雄からバスで恒春（ホンチュウ）。墾丁（ケンティン）へ向う。少し前まで阿里山に居たせいもあって、暑さが身にしみる。墾丁で2泊して墾丁公園へ通っていたが、1泊は公園内です。墾丁公園は正式には恒春熱帶樹木園といい、海拔100～200mの比較的なだらかな丘陵の広大な国立森林公園である。温暖な海洋の影響を受けて暑なお暗い熱帯密林が形成されている。ここではアマガサヘビやヒャッポダなどの毒蛇が出没することである。これに咬まれたらいちごろと言うが、あまり気にせずに歩きまわる。ここは

やはり南端という感じである。蝶などではフィリピン系のものが記録されている。クモではどれがフィリピンにいるかすら良く分らない状態だが、ジャノメグモは多数採集した。ジャノメグモは日陰に円網を張っている。ボロアミグモやジョウゴグモの一一種、シロカネグモの一一種などもいる。オオジョロウグモの網にはアカイソウロウグモが多く見られ、1つの網に20頭以上もいるものもあった。その他名前の分らないものが多く、ハエトリグモなどは全然分らない状態である。

知本温泉

15日墾丁公園をあとに知本(チーボン)温泉へ。台東(タイトン)の近くでは唯一の採集地で、案外山奥へ入ることができる。着くとすぐに近くに採集に出る。ちょっとの採集でゲホウグモを2頭とることができた。墾丁公園とは違うシロカネグモの一一種も採集、これも第4歩脚脛節・膝節に毛束がある。次の日から山地へ入る。ウズグモに変ったものが多くとれる。ここで初めて台湾特産種と言われているザウタートゲグモを採集することができた。色彩は腹部が黄色で刺の部分が赤色である。ここ一帯も南方系の色彩の強い所である。海岸の方まで出ると遠くに蘭嶼(ライユウ・紅頭嶼)が見える。

知本温泉から台中へ

17日の夕方になって急に移動しようということになる。台東から花蓮(フォアリエン)、さらに大禹嶺(ターウリン)へと行くには、台東を夜行でたって、花蓮から朝のバスに乗るしかないと分かったからである。知本温泉からバスに乗ったが、私営のバスであった。幹線には公路局のバスが走っているが、地方には小さなバス会社が多くあるようである。台東発花蓮行の夜行普通列車は思ったより混み合い、座るのがやっとという状態で寝るのもおぼつかない。早朝花蓮に着く。皆寝不足のせいかぐったりしている。ここから梨山行きのバスに乗る。大禹嶺から霧社(ウースエ)へ行くバスはないとのこと、大禹嶺へ行ってから考えようということになる。寝不足ということもあって、皆バスの中ではぐっすりと寝込んでいる。この付近はとても景色のいい所なのに、今となっては全くおしいことをしたものだと思っている。結局そのまま梨山へ行くことになった。梨山へ下車してがっかり。ここは一面見わたす限り梨の山と化している。早々に切りあげ次のバスで一路台中へと向う。東西横貫公路はずっと崖を切り開いた道であり、それ違うのもやっとという所や、時間的に一方通行という所がほとんどである。バスの窓から外をのぞくと谷底しか見えないなどという所さえある。こんな所をずっと来たのだからあとでゾッとした。台中に着いたのが午後の4時頃で、知本温泉から20時間もかけての移動であった。

中部地帯

ここが採集の本命であったが、溪頭(チートウ)の採集を終り、埔里(ブーリー)について3日目から5日間は台風の影響で、ずっと雨でほとんど採集できなかった。

19日溪頭に来る。ここは台湾大学農学院の実験林になっており、一般に開放されている。鳳凰山(フンファンサン)のふもとで、阿里山に通じる道がある。クモの採集には特に良いとは言えないが、一度行くのも良い所である。コガネヒメグモの一一種を採集したが、日本のコガネヒメグモに近似しており、これまで台湾から記録されているコガネヒメグモはこれに当たるのではないかと思

KISHIDAIA No.43, 1978, Jul

っている。夜間採集でクワガタ類やテナガコガネを採集した。イエオニグモやアシナガグモが網を張っているのが見られた。

22日埔里へ。翌日、翠峰(ツイヘイ)へ採集に行く。ボロアミグモの成雄やオウギグモの一種、ヤチグモの一種などを採集したがあまり面白くない。次の日からの下見にと南山渓(ナンサンチー)による。キベリミジングモの雄を採集したのが一番の収穫だった。24日からずっと雨であった。25日の昼ごろ小降りの雨の中を日月潭(リーユエタン)へ行く。網をねらしながらの強行採集といった具合である。クモは雨の中でも採集できる利点がある。この一帯は観光化されているが、思ったより良い採集地であった。埔里は、蝶などの標本の集産地となっている。台湾で採れる蝶や甲虫のはほとんどがここ標本店で買える。多くの店があるが、中でも木生昆虫館では、標本の販売のほかに、昆虫の展示もしてある。ここでは台湾以外の昆虫なども扱っている。マレー産のサソリなどもあるのに驚いた。15cmほどで、値段は150元と手ごろなので買うことにした。南米のトリクイグモも前にはあったということで、これは注文してもらうことにした。

台北

埔里に5泊もしたのに、まともに採集できたのはたった1日と全くさびしいかぎりであるが、7月27日台北行きのバスに乗ることにする。29日に吉村氏が香港へ行くことになっているし、私達の帰国予定が31日だった。この日も雨で、これから採集をあやぶみながら、また、これまでの採集を振り返りつつバスの中で6時間程過す。台北に着くころにやっと雨もあがる。

28日に陽明山(ヤンミンサン)へ採集に行く。ここは台北市内で手ごろな採集地である。8月2・3日とここで採集することになるが、ミジングモ類やヒシガタグモ類がとれ、これまでと違った収穫だった。ミジングモ類では、カニミジングモ・キベリミジングモそれにコアカクロミジングモと思われるものの3種を採集できた。さらにオオスミコガネグモが採集でき、写真をとることができた。29日から31日まで再び烏来へ行くが、ちょっと時期遅れの感がした。

31日烏来から台北にもどり、すぐ有村産業へ行く。本日の船は欠航とのこと、全くがっかりする。台湾での気象情報は全く少なく、台風が台湾の方へ近づいているというのは前日に知っていたが、それが沖縄の方から台湾に向っているとは全然知らなかった。午後から風がひどくなる。街に看板が飛び交うといったすごい風である。あとで分ったが、台風が石垣島の方から基隆・台北と直撃し、死者なども出たという。旅館は停電で水も出なく、心細い一日であった。次の日有村産業へ再び行って次の船便を聞くと8月7日とのこと。再びがっかりする。8月2日でビザの期限切れとなるので、台北市警察局へ行って延長をする。これから一週間は台北に宿をとり、付近へ採集に行ったり、見物をしたりして過す。台北市内に買い物に行った時、途中でトイレに行こうと思ったが、デパートでいくら探しても見つからない。台北で一番大きい遠東百貨店でさえこんな具合である。また、駅にあるトイレでは、小の方は無料であるが、大の方は使用料2元とられる。女子トイレは一律2元である。これを知らないで入ろうとすると、管理しているおばさんが飛んできて文句を言われる。多くの場合トイレの戸にカギをかけてある。トイレの点では全く不便な所である。

帰国

8月7日，待ちに待った帰国の日である。昼ごろに汽車で基隆へ向う。午後7時発の船なのに早すぎる感じが強かったが，何もすることないので早く行くことにした。泊っている船を見てやっと日本へ帰れるという実感がわいてきた。出港はさらに遅れ9時ということになる。なかなか日本に帰してくれないという感じである。税関の検査は全く簡単，夜遅くなつたからかもしれない。クモを採集してきたと言ったら，リュックの上の方を少しと，クモの標本の一部を見ただけでバスした。やっと船に乗り込むことになる。9時20分基隆港から一路那覇へと向かう。

船の中では，免税品を売っている。タバコはチェリーやセブンスターが80円。洋酒ではオールドパーー2300円，ジョニ黒2500円と普通日本で買う3分の1程度であった。日本で売っている洋酒がいかに高いものかが分った。

8月8日午後4時やっと那覇に着く。これから大阪までまだ船に乗ると思うとうんざりした。とにかく無事にこの旅行を終ったが，往復に船を使うというのはもうたくさんという感が強い。

今回の採集旅行ではとても多くのクモを採集することができた。何種になるかは良く分っていないが，その中でヒメグモ科約30種，コガネグモ科約50種である。分り易いものから調べようと思っているが，文献の問題が多く，非常に困難な状態にある。少しでも多くのものの種名をはっきりさせたいと思っているが，カニグモ類やハエトリグモ類は誰かに調べてもらいたいと思っている。

今回の旅行に要した費用は，パスポートとビザ等の用意に1万円，大阪から基隆までの往復3万7千円，それに台湾での宿泊費・食費・交通費が約5万円で，台湾での採集は非常に安くすむ。ただ，宿泊は普通の旅社に，交通は鉄道やバスを使った。台湾のバスは安く，路線も多いが，飛行機やタクシーを使うと相当高くつくようである。しかし，日本での旅行のことを考えると非常に安くすむ。今後再び台湾へ渡航したいと考えている。

この旅行記を終るにあたり，今回の旅行を計画され，途中同行していただいた吉村守氏に心から感謝の意を表する。また，台湾でお世話になった現地の方々に対しても感謝の意を表する。

ビジョオニグモのフ化に接して

佐藤幸子

1977年12月27日 前年の冬に卵ノウを見つけ、今年の春にかけて観察を続けた同じアオキの葉に、又ビジョオニグモの卵ノウを一個見つけました。不本意ながらも行方不明にしてしまったあの一匹の子グモか、又は分散していった子グモ達のうちの一匹かどうかよくわかりませんけれど、まず私の庭を実家として成長し結婚し子供を産んだと思うと、涙が出る程うれしくなりました。その上今日は、前の親グモが死んだ命日なのです。それで昨年と同じように空瓶に入れ、冷たい部屋にしました。卵ノウの大きさその他は、前年の卵ノウとまったく同じです。（図参照）

1978年3月12日 卵ノウの中でフ化が始まりました。（前例は11月23日に産卵し3月5日にフ化しました。）今度は卵の数をかぞえるためと、フ化の様子を見るために、綿をひろげた上で卵をバラバラに散らしました。卵の数は172個。フ化した数は20個。体長1.1mm。他ボロボロした卵のうち、みずみずしく見えるものと白っぽいものとが半々で、コウジカビの様なものでくっつき合っているかたまりが2個（内片方は7個、他は22個の卵を数えました。）卵は0.9mmです。

3月17日 すでにフ化した子グモのうち、黒っぽく色づき始めたのが3匹。本日見たところでは、卵の全個体数の $\frac{1}{3}$ がフ化しているようです。フ化するとだんだん綿の内にもぐって行くのでよくわかります。

3月19日 まだフ化しない卵が18個。卵のかたまりは、内部からこわれて来てまづまづフ化し、アワオコンをくずしたようなあんぱいで重なりあったまゝ子グモが動いておりました。

3月20日 一匹脱皮。体長1.5mm。2令となりました。

3月21日 一番最初にフ化した全員脱皮完了。まだ脱皮しない子グモ達の中に、奇形2個体、発育不全2個体を認めました。

3月24日 最初に脱皮した一匹の子グモ第2回の脱皮を終え3令となりました。体長1.9mm。動作が活発となり糸を使い始めました。（2令のクモは、手の上でためして見ても糸をつかわずコロコロしていますが、3令のクモは糸をひいて手の上から逃げ、糸をひいて下へ落ちました。）フ化しない卵がまだ4個ありますが、どうもこのままフ化しないものようです。

3月25日 黒い脱皮ガラがあちこちに散らばって、第一期生達は無事第2回の脱皮を終えたものようです。それで1令（淡黄色）、2令（腹部淡黄色、歩脚及頭胸部黒色）、3令（腹部淡緑色に黒の斑紋、頭胸部黒色、歩脚黒と緑のダンダラ模様）入りまじって、とてもにぎやかになりました。分散の始まる予定日まで、あと6日の日数があります。（3月31日の予想）

3月31日 景1：00 4匹の子グモが分散の様子をあらわし始めました。マサキの葉に放してやるとあまり動かず、葉の裏にジッとしています。夜8：00 12匹の子グモが右往左往し始めています。明日まで待ってもらいましょう。昨年の観察では、フ化から分散まで19日かかっ

ていましたが、今年の子グモも正確に19日目に分散を開始しました。

4月1日 昨夜の12匹の子グモをマサキに放しました。1匹だけ早速葉の先に住居を作り始めました。スケスケの住居ですが、どうしたことか外側に止って、昨年と同じように頭を天に向けています。他の子グモは葉の裏をモソモソと歩き、時々強い風に飛ばされてプラ下り、もとの葉にもどってサテどうしようと迷っている様子でした。まだまだ足の力は弱いようです。

4月2日 今まで卵ノウのかわりをしていた綿を、子グモ共々マサキの葉に取りつけました。昨日の分散した子グモ達は、葉の裏にジッとしているものと、糸をわたして動いているものと半半で、住居を作ったクモは自分の身体としては少し広すぎる葉わたりのところに作ったのが具合わわるかららしく、空でした。

動いていた子グモの間で気がついた事を記します。上の葉と下の葉の間、又右の葉と左の葉の間と、クモそれぞれに5cmから10cmの糸を一本張りわたし、その中央又は中央寄りに白い糸のかたまりをつけています。それの大きさは0.5mm以下の『まが玉』のような形をしていて、糸を渡しているクモの子全部ばかりでなく、誰もいない糸にもそれが見られるのです。昨年の観察では、このような現象は見られませんでした。クモ自身は、その糸をわたりあるいは、その糸のかたまりの上につかまってジッとしていたりで、さまざまの様子をしていますが、糸のかたまりの大きさもまちまちでした。

4月4日 昨日の大雨で子グモの糸は全部なくなっています。葉の裏に張りついているもののうち1匹は、端にそって細長く1.5cm位ハグモの作るような厚い真白な住居を作り、その中にかくれています。ビジョオニグモ式住居を作ったのが2匹、そのうち頭を地上に向いているもの1匹、右に向けて横に寝ている(?)ものが1匹。とにかくいろいろ面白いことをしていますが、どうも皆飛び様子が見えないようです。

4月6日 12:00 非常に暖いお昼です。風も大分あるのに今年の子グモ達は、飛ぼうという意志が丸でないらしく、みんな下へ下へと移動してほとんどが住居作りに忙しいのです。それもすでに住んでいる先輩の上に自分の糸をかけ始め、それが終るとあたり前のように先輩のわきにすべり込みます。この先輩は例の横むきの子グモで、どうなる事かと見ていますと何のめめ事も起らず、後輩は頭を下にして落着いたので実にしまらない配置になりました。他の葉に作られた住居も4匹が限度になっていて、それも昨年のように行儀よく二列に並ぶどころか、上下左右と自分の好き勝手な方をむいています。だから4匹以上は入れないです。親の性格が個々の卵ノウに現れるのか、子グモ達の行為が昨年とちがうので面白くてなりません。又6匹の子グモは葉の裏や茎の中頃から3cmの糸をたらし、その前にぶら下ったまま風が吹いても止んでも、何時間でも中吊りを楽しんでいます。とてもつきあいきれません。

4月7日 アオキに取りつけた綿の中に、まだ3分の1の子グモが残っています。その近くの一枚の葉のつけ根に8mm位の真黒い毛虫の玉のようなものがくっついているので、よく見るとどうでしょう、10匹の子グモが重なり合ってダンゴになっているのです。まだ中吊りのクモが二匹、あとはビジョオニグモ式住居を作り一匹もしくは数匹で落着いているものと、葉の裏に同様の住居

KISHIDAIA No.43, 1978, Jul

を作つて、この場合いづれも一匹ずつですが、曲りなりにも落着いているものと、5cmから10cm位の糸を一本葉と葉の間にわたして、今日はまたが玉状の糸玉を三個つけた子グモが一匹。

4月10日 夕方4:00 今日、綿(私設卵ノウ)の中から出て来た子グモ達の中に、6匹ばかりが高いところを目指し、アオキの蕾と蕾の間10~15cmに糸を張りました。一本でなく二本三本と足場をかためてあり、本人も中央に止まることなく動きまわっておりました。そのうち、空にキラリキラリと光るものがあるので確めて見ますと、柿の木の近くに陣取った一匹のクモが1.5m位の長い長い糸を流しているのです。そのクモは蕾の間15cm位の糸を張りわたし、糸の中央にじっとうずくまり、流した糸がどこかにからまるのを待っているのですが、どうしても風に吹き返されてアオキにからまってしまいます。しばらくすると又糸を流します。随分待っていたのですが三本目の糸も失敗し、陽もかげって寒くなってしまったので観察を中止しました。これで昨年の疑問であったものの一つ、飛んで柿の木に取り付くクモばかりでなく、同じような場所に長い長い糸を掛けて渡っていくクモもあるのだということがはっきりしました。綿の中にはまだ30匹子グモが残っています。

4月11日 綿の中にいる子グモ達を皆追出しました。今まで観察したクモ達と同じように、みんな下へ下へと降りて行きました。先日見たクモの子ダンゴは何時まにか消えています。4匹の共同住居のうち1枚の葉は1列縦に並んでいて、中の1匹だけ上向で兄弟同志顔をつきあわせてしまっているのが、実におかしく見えました。その後4月15日まで様子を見ていましたが、別に変わったことがありませんでしたので、観察を止めることにしました。

○卵の数 172個

奇形2、発育不全2、フ化しない卵4

○卵の大きさ 0.9 mm

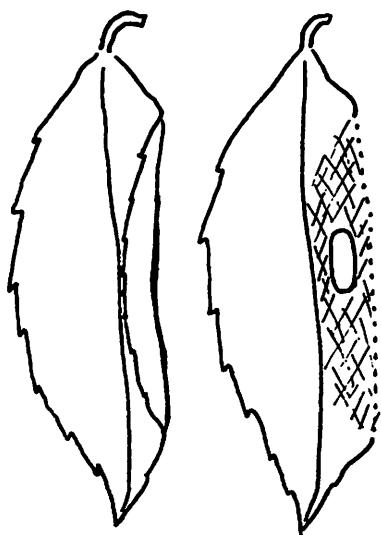
○子グモ1令の体長 1.1 mm

○第1回脱皮後 1.5 mm ブ化より8日目

○第2回脱皮後 1.9 mm 前回脱皮より4日目

昨年(1977)3月5日フ化、3月24日分散始まる
(この間19日かかります)

今年(1978)3月12日フ化、3月31日分散始まる
(昨年と同じように19日かかりました)



↑
1.4 cm
↓
0.5 cm
ビジョオニグモの卵ノウ
かいこのマユのような感じ。卵ノウを保護する糸は非常に強く、しかも幾重にも重なり、厚い。卵ノウ保護糸の中間に浮いている感じである。色は純白。葉はアオキ。葉の片端を葉脈のところまで巻き込み、卵のうを保護してある。

1976年11月23日 産卵

1977年 3月 5日 フ化

確認個体数 124

クモ標本観察のための一用材(シリカゲル粉末)

松 本 誠 治(杏林大・医・生物)

C.G.Butler 氏が、イギリスクモ学会の機関誌に、クモの標本を観察する際、クロマトグラフィー用のガラス球(Glass beads)を使用すると便利であると紹介をしている。氏は、機関誌に発表する前に、あらかじめ同好者数名にこのガラス球を試しに使ってもらっている。その結果は、クモを尾部で立つように固定させてクモの顔を観察するのに都合のよいこと; とても小さなクモでもこのガラス球にそっとおしつけると、どの方向ででも固定させることができること; 膜節の *Trichobothria* を観察する際には、このガラス球の反射が採光に有効であることなどの回答を得て、このガラス球の有用性を認めてもらったとある。また、ガラス瓶の中に、このガラス球とクモと一緒に入れて数日間持ち歩いた結果も、毛や棘の脱落はなく安心して使用できることができたという。氏が使用したガラス球は 80 mesh のものであった。(Bull. Brit. Arach. Soc., 2(9):200, (1973))

さて、この記事を読んで私も試めしてみたいと思った。このガラス球というのが正体不明で、代用品としてシリカゲルの粉末を使うことにした。(しかし、シリカゲルは、水ガラスともいわれる所以、Butler 氏のいうガラス球は、このシリカゲルのことかもしれない。)日本にある薄層クロマトグラフィー用のシリカゲルの粉末は、粒子がそろっているのがあまりなく、80 mesh のものは入手できなかった。結局、和光純薬工業K.K.のワコーゲルQ-50(60~200 mesh)を試みに使うことにした。4cmのシャーレに 7mm 程の厚さにこの粉末を入れ、あとは普通の液浸標本と同様に観察する。Butler 氏が紹介しているように、標本を観察したい方向で、かるくおさえつけるようにして置くと、ぴたりと固定される。今までに、脱脂綿、スポンジ、発泡スチロールなどいろいろと試してみたがどれも満足するものではなかった。このシリカゲル粉末は、満足度90%といえる。10%の不満足は、小さい標本の場合うまく固定させようとすると粉末中に埋ってしまうことがあること; 大きな標本の場合よくおさえつけないとシャーレを動かす度に移動すること; *Trichobothria* の観察には紹介されているような採光上の有効性はみられないようと思えること; シャーレ中のアルコールを交換する際流失を防ぐのに神経を使うことなどである。しかし、他のものよりは、はるかに便利なものである。Butler 氏同様、私も熊田憲一氏などに使ってみてもらったところ、『満足!』という回答を得た。

入手したワコーゲルQ-50は、まだ残余がある。この観察用材に興味を持たれた方に、お頒けしたいと思う。4cmシャーレに 7mm の深さで入る程度をお送りしたいと思う。郵送料共で 50 円切手 3 枚をそえて申し付けて下されば、折り返しお送りする。(187 小平市学園東町 25-31)

アズチグモの食餌

小野展嗣

アズチグモ類 (*Thomisus*) はしばしば自分の体の2倍も3倍もあるような大きなハエやミツバチを捕食している。それはこのクモが花のかげでえものを待ち伏せことが多いからであろう。そういう光景を見て、こちらもつい、「アズチグモはときには自分の体より大きなえものを捕食することがある。」などと書きたくなるのだが、よくよく考えてみると、今まで私が観察した限りでは常に自分の体より大きなえものを食していた。そこで試みに、飼育している歐州産のアズチグモの一種（幼生・体長4mm）にいろいろな大きさのハエを与えてみた。その結果、彼が捕食できたのは自分の体長と同じくらいか、それ以上の大きさのハエであった。体長2~3mmのすばしこいショウジョウバエのたぐいは決してつかまえることができなかつた。ハエは平気な顔をして彼の体の上を歩いたりする。クモは一度は捕えようと試みたが、閉じた歩脚の間をハエはするりとくぐり抜けた。よほどノロマな小バエでない限り彼の歯にはかかりそうもない。

ところで、このクモの捕食動作は極めて消極的である。第Ⅰ、Ⅱ脚を大きく広げ、えものの虫が目と鼻の先まで来てからバッと捕えるのである。これに対してハナグモやヤミイロカニグモではもう少し積極的で、自分から1~2cm離れたえものが逃げようとするのを追いかけて行って捕えたりもする。また、小さなハエも苦手ではあるが捕食するし、イモ虫のような飛ばない虫でも飼育例では結構食べる。同じカニグモの仲間でもその習性は微妙に違っているようである。ガザミグモ (*Pistius*) などはアズチグモと似ていると思う。

何百例も確めた訳ではないが、自然状態でのアズチグモの食餌はかなり限られているものと推察される。

石垣島で採集したサヤヒメグモ

吉田 哉

昨年(1977年)春、石垣島川平でサヤヒメグモを採集した。いずれもビーティングで、かん木の枝の枯れている所などから採集した。成体以外にも亜成体、幼生と思われるものがあった。雄の成体の腹部先端はサヤ状になっているが、亜成体以下ではそれが見られず、雌と同じような形になっている。また、雄の触肢の色も幼生は白色、亜成体は黒灰色、成体は黒褐色と変化している。

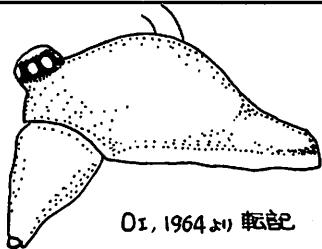
イマダテテングヌカグモの採集記録

熊田憲一

土壌や落葉の中に見られるクモだが、現在まで東京高尾山周辺でしかその記録がなく、比較

的珍らしいクモであった。

私は1977年から1978年にかけての冬期に、神奈川県各地で土壤に棲むクモを採集して歩いたが、その時にこのクモを見い出すことができた。崖の下や道端の吹きだまりのような所を主に採集して歩いたが、神奈川県南端の三浦半島から北端近くの津久井（高尾の南隣）まで広くこの種を採集することができ、一冬の採集総個体数は44頭となった。神奈川県以外では東京八王子城跡でも採集した。このように多く得られたのだが、あまりにも小さく（1.2mm～1.5mmの体長）ほかの種の幼生のように見え、今まで採り逃がしていたようだ。



雄は時に眼域が突起しており、ユニークな形態をしている。（図）。

アシナガグモ科2種の卵のうを確認

鈴木勝浩

昨年（1977年）9月2日に、雑草の間に水平円網を張っているトガリアシナガグモの雌成体を採集して、小さなサンプル管（底面の径2cm・高さ4.5cm）に入れた。翌朝見ると、サンプル管の内側に卵のうが作られてあった。卵のうの形は長径10mm、短径4mmほどの円形のようであった。30個ほどの卵のうを包んでいる糸は、やや黄色を帯びた白色の糸であったが、卵のうの上には、卵のう本体とは違った濃い黄色の密にねじれた糸のふさを付着させてあった。母グモは産卵後6日目に死んだ。この卵のうは未受精卵であったのか孵化しなかった。



卵のうのおもて



卵のうのうら
トガリアシナガグモの

同年10月3日に、ネギ畑において、地面を歩いていたアシナガグモ科の一一種雌を採集した。トガリアシナガグモと同じ大きさのサンプル管に入れておいたところ、3日後の6日夜に産卵した。卵のうの形はトガリアシナガグモの卵のうをそのまま小さくしたようで、長径5mm、短径4mmであった。12個ほどの卵を包んでいる糸は白色の糸であったが、卵のうの上には深緑色をしたふさのようなものを付着させてあった。母グモは産卵後5日目に死んだ。このクモの卵のうもトガリアシナガグモと同様に未受精卵であったのか孵化しなかった。（このアシナガグモの一一種は、現在九大の大熊氏に同定をお願いしております。）

10大ニュース

(運営委員会選定)

その1

ミズグモ・ミズグモ・ミズグモ

5月22日正午NHKニュースは突然ミズグモ発見のニュースを流した。日本クモ学界戦後最大の発見になるであろうと言われていた。ミズグモはついに京都大学の吉田真氏によって5月19日京都の池から発見された。このミズグモ採集の記録についてはすでにAtypus No.69 p.38に八木沼先生によって報告されている。談話会でも昨年の10大ニュース予告のとおりミズグモ調査隊結成を急いでいた折でもあり、20数名の参加申込が殺とうしていたが、この発見のニュースのため次々ととりやめの問い合わせが続き、名人山川氏は特にやる気をなくし中止を決定、ついに6名となってしまった。そして、調査隊員の沼にとび込む奮闘のかいもなく、ついに発見できず帰京した。ところが大阪においても地元関西でミズグモを探集され、ひそかにファイトに燃えていた西川喜朗氏は、関西クモ軍団(桂・道盛・梅原・富永・春沢の諸氏)をひき連れて東北に出陣。9月23日青森県津軽半島なんとか村の沼においてついにミズグモをすくい上げた。日本で6頭目、第3の新産地の発見となった。この青森のミズグモについてはAtypus No.70 pp.13-18に10大ニュース風の文章で書かれているので参照していただきたい。

その2

クスミサラグモの卵のう

サラグモの仲間は以外と多くの個体がいて、どこにでも見られるのに、どういうわけか卵のうが全くといってよいほど分かっていなかった。しかし、銅育しているクスミサラグモが卵のうを容器の隅に作り、自然状態でないにしろ一応明らかになった。卵のうは物に付着させるかたちで、卵のうの周囲を薄いが糸が密で光沢のある天幕状の幕でおおわれている。この天幕は水をはじき、全体としては湿気を防いでいると思われ、自然では湿気の多い所でも充分安全で、かつ物に付着させることを考え、網の近くに卵のうが見られず産卵期には網を留守にすることなど考慮すると、落葉の中、石の下、樹皮下などが考えられるが、数度に渡る観察検査では見い出すことが出来なかった。あれだけの個体数がいて卵のうが見つからないのは不思議なことである。

その3

キンヨウグモの網は！

数年前に円網を張る幼体が確認され、ちょっとした話題になった。だがその後、他のクモの網(円網)に入り込んで網主を襲っているものが確認され、やはり円網は張らず入り込んだのでは、ということになった。しかし、高尾山系で6月に行なわれた採集異常集団水旺会の夜間採集の折に、円網を張っている多くの個体を確認した。これらは若令幼生で、少し大きくなると成体同様の網を張ることも同時に確認した。これによりキンヨウグモは若令幼生では円網を張ることが明らかになった。水旺会常々の快記録の一つである。

その4

キジロオヒキグモ ひさびさの出現

出向いた回数は150回を有に超し、高尾山の隅から隅まで知りつくしていると豪語する新海氏は、数年前神奈川より山川氏の1回の来訪でキジロオヒキグモを高尾山近くで採られ、うらみ骨髓。特にこれが東京新記録とあって、その後目をむいてキジロオヒキを追っていたものの成果が上らず、近頃はあまり気にかけなくなっていた。ところが高尾山で7月岩波映画の撮影でマネキグモを探していると、遠くに縦向きに止まっているマネキを発見。近づいてみると何とキジロ！ワッとばかりに狂喜乱舞したものの網を張っていなかったので採集せずに帰り、翌日網の撮影をした後採集したことである。すぐに採集せず網を張るまで待つなど、他の採集者もこれをもって範とすべきであろう。と氏は述べていたが、うずく腕を押えていたため腕がつり、うれしさのため一週間ほど顔の筋肉がゆるんで困ったとも述べていたとかいないとか。

その5

北海道のイソコモリグモ

日本のタランチュラと言われるイソコモリグモが北海道春国岱の海岸で、根室の小鳥屋さん（近所ではこのように言われている）高田勝氏によって採集された。その後8月12日高野・松本・佐藤・新海・熊田の諸氏によっても確認され、熊田氏の命がけの人体実験の結果（クモをころがして遊んでいる時、おこったクモに咬まれた）毒も無いことが明らかになった。なお、イソコモリグモ・イシカリコモリグモについては本誌1642に発表されたように、学名は *Lycosa ishi-kariana* が有効となり、和名はイソコモリグモが使用される予定。

その6

ニワオニグモの日本分布確実

布施明のデビュー曲としても有名な霧の摩周湖は、どこに霧が、と首をひねるほどの上天気で、雲一つない青天であった。8月14日、霧のない摩周湖などはつまらぬ、と周辺の森に入って採集。ニワオニグモがもし出ればこのあたりで、と予想して目を皿にして歩き、アッと手を伸ばすとキバナオニグモがころがり込んできたりして成果なし。そのうち奥に入っていたM氏が出て来て、ニワオニか、これがそうじゃないか」とこともなげにピンを差し出す。なんと、ニワオニグモが2頭もアルコールの中で泳いでいた。さっそくこれを採った所に急行し、それこそ目をオボンのようにして見回り、S氏がやっとこ1頭生け捕った。これはその後の飼育で成体になり、確実にニワオニグモと同定できた。日本に居る居ると言われてはいたが、今回が日本の正確な記録としては最初であろう。また9月に入って本州北アルプス常念岳においても松田まゆみ氏がこのクモを採集してきた。

その7

東亞蜘蛛学会東京大会開かれる

東亞蜘蛛学会第9回大会が、日本私学教育研究所研修センター（東京・八王子市）で、8月21・22日の両日にわたって開かれた。今回は前に同センターで行なわれたときと異なり、天候に恵まれた2日間であった。詳細は談話会誌巻16102のAtypus, (70): 44-70を参照されたい。

KISHIDAIA No.43, 1978, Jul

その8**観察会記録 100種を超える**

観察会も今年より同じ場所で一年間計4回の観察を試みるようになりました。試みの始めは以前にも会を開いたことのある八王子城跡です。この会2回目の秋の時に驚くべき数字が出て出席者を喜ばせました。夏の時も90余種が記録され、一日の会としては上々の成果でしたが、秋では一挙に100種を超えていました。今まで行なわれた観察会では70～80種が平均で、一日の観察会の目安となっていましたが、軽くこれを更新し109種と日本最高の記録を作った。しかし、これによって今までの平均数が直ちに変ることは考えられませんが、今後の観察会したいでは変更もあり得ます。今のところ我が会の観察会が世界一すばらしい（観察眼の良さと楽しさと観察数）と自画自賛している。みなさん、もっと観察会に出て来ましょう。

その9**八木沼健夫博士還暦記念号刊行される**

1977年11月3日の発行日で、東亜蜘蛛学会会長 八木沼健夫博士の還暦記念号が、*Acta Arachnologica*第27巻の特別号として刊行された。博士の還暦の誕生日は、1976年2月2日であって、発行は年号では1年遅れてしまったことになるが、本文406ページの記念号は、*Acta Arachnologica*の本誌の量の数年分にもまさる立派なものである。これまでのものをまとめられた編集の方々、特に西川喜朗氏のご苦労は、どれだけ大変なものであったか想像もつかない。また英文の添削をされたお二方も、貴重な時間を費やしました神経もすりへらしたことを思うと、頭の下る思いである。1978年版のC.I.D.A発行の業績目録（1977年及び印刷中）をみると、日本人の名前が目につく。日本のクモ学界の底力を示したものといえる。この底力が、*Acta Arachnologica*第27巻の特別号「八木沼健夫先生還暦記念号」で示せたことは、1977年クモ学界のニュースとして特筆に値するを考える。談話会通信（22）：10に同時発行の随想集「蜘蛛の糸」もあわせて紹介されているので参照していただくとともに、ぜひ入手されることをお勧めしたい。

その10**第7回国際クモ学会議に日本から5人出席**

3年に一度開かれる国際クモ学会議は今年で第7回を数え、7月27日から8月4日にわたりイギリス・エクセター市のエクセター大学で行われ、世界から170人のクモ学者及びその家族が集まった。この大会に、日本からはクモ学会会長の八木沼健夫氏をはじめ西川喜朗、本田重義両氏及び小野展嗣夫妻の5人が参加した。日本人がこの大会に参加したのは1971年第5回（ブルノ）の鈴木正将氏、1974年第6回（アムステルダム）の小松敏宏氏に次いで3回目だが、このように多勢が乗り込んだのは初めてのことである。朝早くから夜遅くまで息つく暇もない程のスケジュールには、講演の他映画やエクスカーションなどの多彩な内容が盛られ、また家族や随伴者のために特別の（クモ抜きの！）エクスカーションも組まれているのはいかにも国際会議らしく、なごやかな雰囲気を醸し出していた。一般講演は二部屋に分かれて行なわれたが、生態学的内容のものが

→ P. 24につづく

八王子城跡のクモ（I）

新海栄一・田中理恵・栗原輝代子・高橋 登

談話会では昨年（1977年）春の観察会まで各県（東京・神奈川・千葉・埼玉）持ち回りで、採集観察会を開いてきていたが、昨年夏より同一場所で四季を通して採集をおこない、季節ごとのクモ相の違いを調べてみるとなり、その第1回目の調査地として八王子城跡が決定した。

採集日は、クモの種類が最も少なくなると思われる2月下旬。春に成体になるクモが産卵を始める5月中～下旬。夏のクモの最盛期である7月下旬。秋に成体になるクモが産卵を始める10月上旬の計4回を選び出した。調査は本来春から始めるのが最も理想的であったが、この計画を企画したのが6月下旬であった関係から、夏の採集会より開始せざるを得なくなってしまい、季節相等の考察の時に不便な点が生じたため、四季別採集記録一覧表は1978年春・1977年夏・秋・1978年冬の順に記している。種数は4回合計で173種に達し、特に1977年秋、及び1978年春は5時間の採集で、110種前後を記録（1日の採集としては日本最高記録）することができた。以下に、八王子城跡のクモ（I）として、リスト及び四季別採集記録一覧表を作成した。なおこれらのクモの季節相の考察ならびに分類、分布、生態上の重要種については次号（44号）で発表の予定である。

調査場所：八王子市元八王子3丁目から下恩方町にかかる八王子城跡（図-1）。

調査日及採集者

○第1回：1977年7月31日（日曜日）

採集者：熊田憲一・並木敏一・貞元巳良・佐藤幸子・鳴田順一・新海栄一・鈴木勝浩・
田中理恵・吉川伊智郎

○第2回：1977年10月9日（日曜日）

採集者：古浜隆・梅田重雄・熊田憲一・松本賢・松本誠治・松浦祐司・小沢実樹・
貞元巳良・鳴田順一・新海栄一・鈴木勝浩・高橋登・高野伸二・高野ツヤ子・
田中理恵・吉川伊智郎

○第3回：1978年2月26日（日曜日）

採集者：蓮沼克巳・熊田憲一・栗原輝代子・松本誠治・松浦祐司・西貝正彦・小沢実樹
貞元巳良・新海栄一・鈴木勝浩・田中理恵

○第4回：1978年5月21日（日曜日）

採集者：相本幸一・藤井悦子・蓮沼克巳・板橋明子・熊田憲一・栗原輝代子・日下部光
代・侍田公子・侍田誠・松田まゆみ・長島忠義・西貝正彦・大野経明・小沢実
樹・佐藤幸子・鳴田順一・新海栄一・高田英子・高橋登・高野伸二・高野ツヤ
子・田中理恵

KISHIDAIA No.43, 1978, Jul

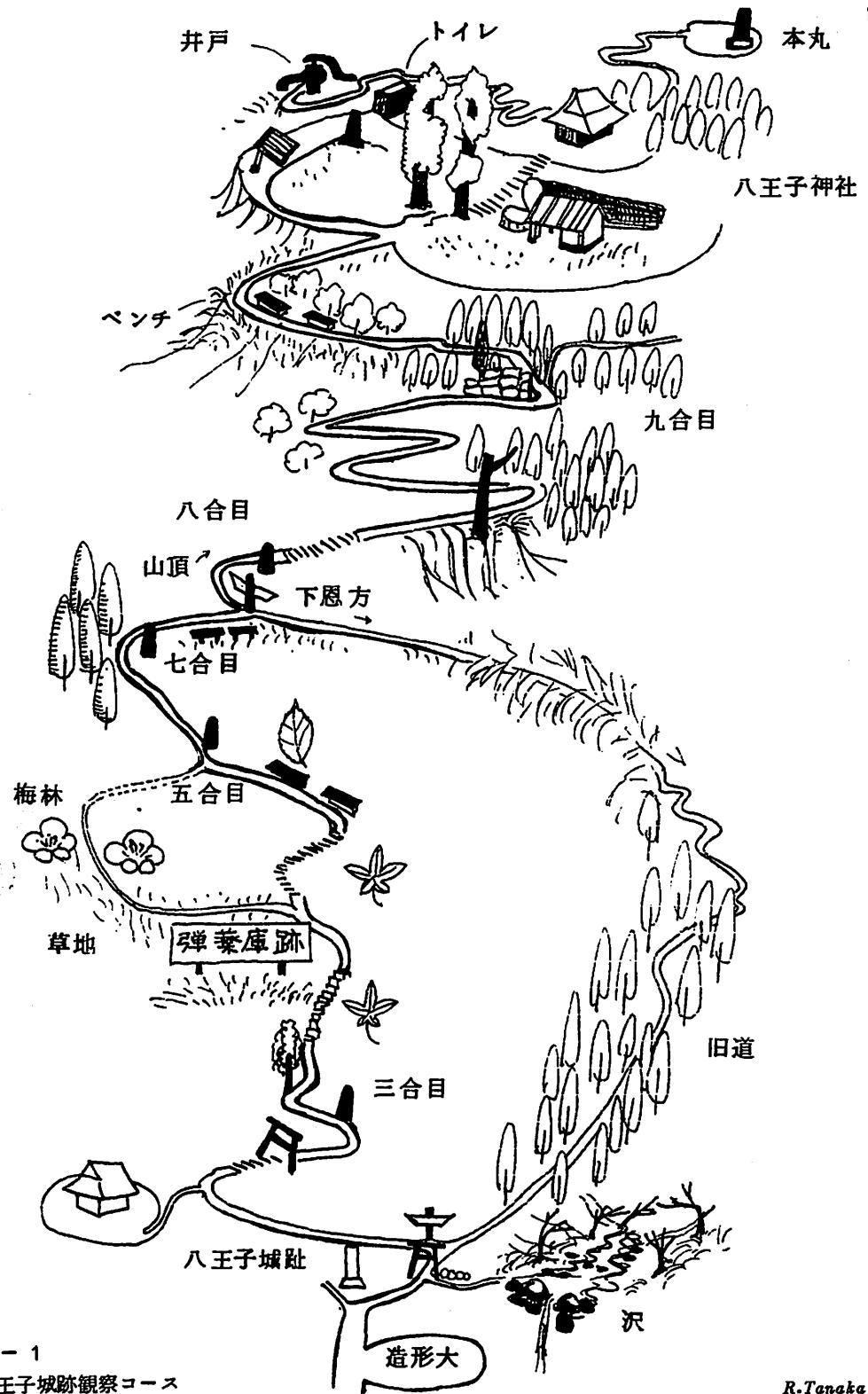


図-1
八王子城跡観察コース

R.Tanaka

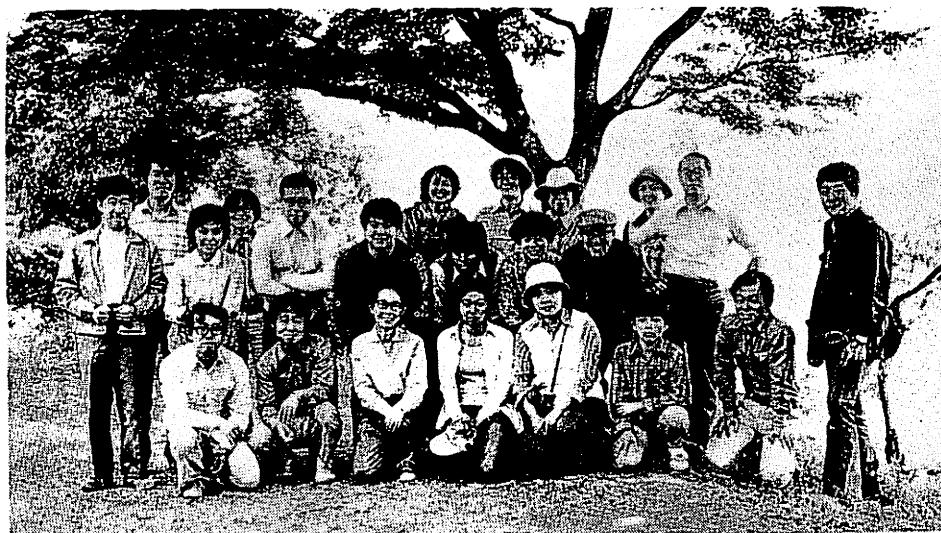


写真 - 1 1978年5月21日の採集会参加者

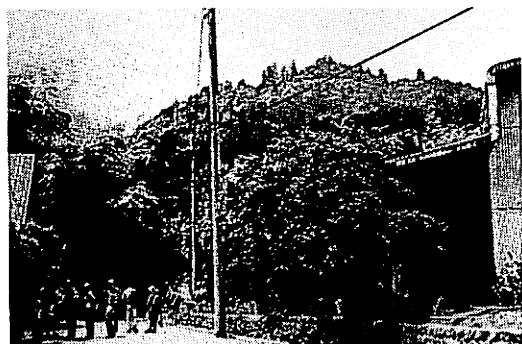
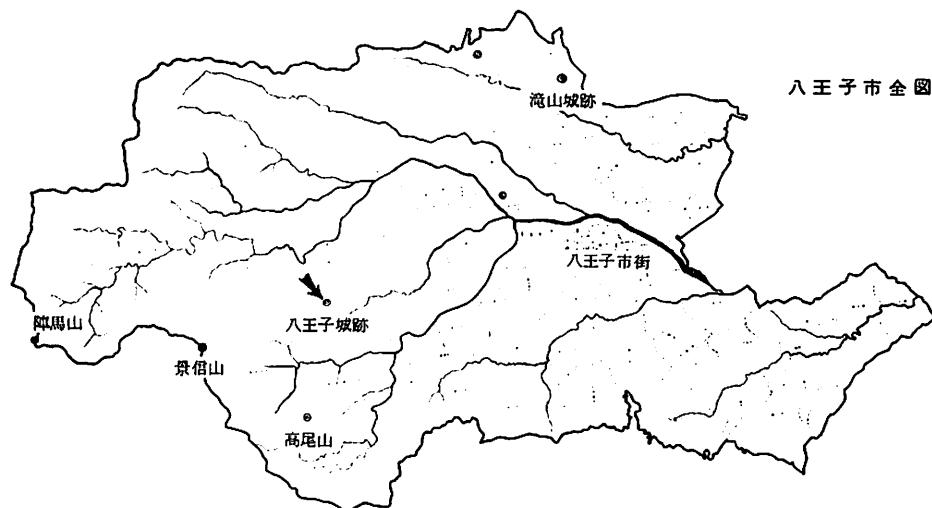


写真 - 2 八王子城跡全景



写真 - 3 二ノ丸から八王子方面を望む



PL.2



写真-4 ヨリメグモの網



写真-5 カラカラグモ幼生の網



写真-6 カラオニグモと卵のう

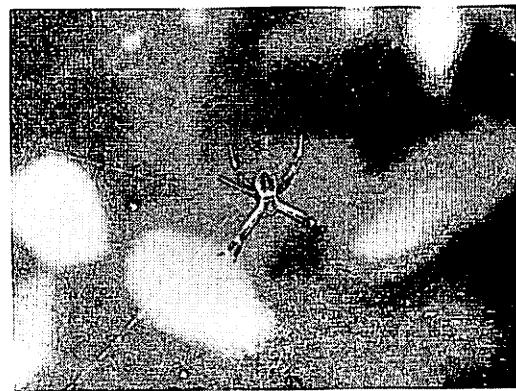


写真-7 コガネグモ幼生

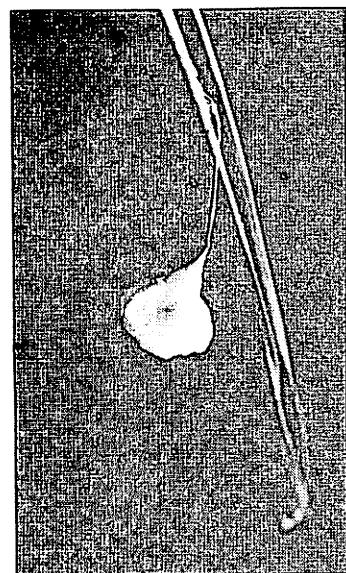


写真-8 クロヤマジグモの卵のう



写真-9 ミヤグモの網

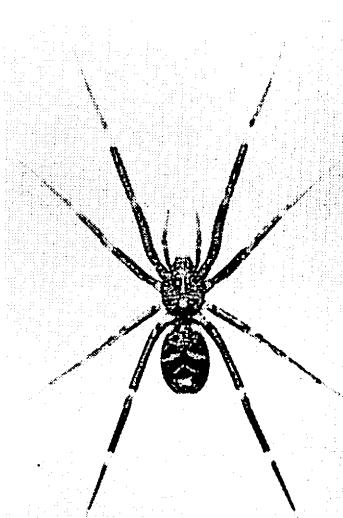


写真-10 ネウラシマグモ

四季別種類一覧表

- 属および種の配列は「日本産真正蜘蛛類目録」(八木沼、1977)による。科の配列は同文献を一部変更したものである。
- 四季別一覧表は、左から1978年春・1977年夏・1977年秋・1978年冬の順に並べてある。
- 一覧表に使用した齢期の記号は、Ad→(成体), subあるいはs→(亜成体), y→(幼生)を示している。○印は幼生・亜成体・成体の全部が見られたものである。
- y(幼生)の中には2齢から-2齢(亜成体の一つ前の齢期)までを含めている。
- 齢期はすべて当日採集した個体によったものであり、この齢期が各種類の採集月における平均的な齢期でない場合もある。

春 夏 秋 冬

I. *Antrodiaetidae*

1. <i>Antrodiaetus roretzi</i>	カネコトタテグモ	○ ○ ○ ○
--------------------------------	----------	---------

II. *Ctenizidae*

2. <i>Ummidia fragaria</i>	キノボリトタテグモ	○ ○ ○ ○
----------------------------	-----------	---------

III. *Atypidae*

3. <i>Atypus karschi</i>	ジグモ	○ ○ ○ ○
--------------------------	-----	---------

IV. *Uloboridae*

4. <i>Hyptiotes affinis</i>	オウギグモ	— y Ad —
5. <i>Miagrammopes orientalis</i>	マネキグモ	y Ad y —
6. <i>Uloborus sybotoides</i>	カタハリウズグモ	y Ad y —
7. <i>U. varians</i>	ウズグモ	Ad, y Ad y —

V. *Segestriidae*

8. <i>Ariadna lateralis</i>	ミヤグモ	○ — ○ ○
9. <i>Segestria komatsuanai</i>	コマツエンマグモ	— — — Ad

VI. *Leptonetidae*

10. <i>Leptoneta striata</i>	ヨコフマシラグモ	— — — Ad
11. <i>Leptoneta</i> sp.	マシラグモの一種	— — — Ad

VII. *Pholcidae*

12. <i>Pholcus crypticolens</i>	ユウレイグモ	Ad, y Ad s.y y
---------------------------------	--------	----------------

VIII. *Mimetidae*

13. <i>Ero japonica</i>	センショウグモ	y Ad Ad,y —
-------------------------	---------	-------------

IX. *Theridiidae*

14. <i>Achaearanea angulithorax</i>	ツリガネヒメグモ	Ad, y — y y
-------------------------------------	----------	-------------

			春	夏	秋	冬
1 5.	<i>A. tepidariorum</i>	オオヒメグモ	○	○	○	○
1 6.	<i>Anelosimus crassipes</i>	アシブトヒメグモ	s. Ad	—	y	y
1 7.	<i>Ariamnes cylindrogaster</i>	オナガグモ	y	Ad	y	y
1 8.	<i>Chryso punctifera</i>	ホシミドリヒメグモ	Ad	y	y	sub
1 9.	<i>C. venusta</i>	コガネヒメグモ	y	—	y	—
2 0.	<i>Argyrodes fissifrons</i>	チリイソウロウグモ	y	Ad	y	—
2 1.	<i>A. fur</i>	フタオイソウロウグモ	y	Ad	Ad	—
2 2.	<i>A. saganus</i>	ヤリグモ	Ad. y	Ad	y	—
2 3.	<i>Dipoena castrata</i>	ボカシミジングモ	y	Ad	—	y
2 4.	<i>D. flavomarginata</i>	キベリミジングモ	y	Ad	y	y
2 5.	<i>D. mustelina</i>	カニミジングモ	y, s	Ad	—	—
2 6.	<i>D. mutilata</i>	コアカクロミジングモ	—	Ad	y	—
2 7.	<i>D. punctisparsa</i>	シモフリミジングモ	y	—	—	—
2 8.	<i>Episinus affinis</i>	ヒシガタグモ	sub	Ad	y	—
2 9.	<i>E. nubilus</i>	ムラクモヒシガタクモ	y	Ad	—	y
3 0.	<i>Phoroncidia pilula</i>	ツクネグモ	Ad	—	Ad	—
3 1.	<i>Stemnops nipponicus</i>	スネグロオチバヒメグモ	—	—	○	—
3 2.	<i>Theridion chikunii</i>	バラギヒメグモ	s. Ad	—	y	—
3 3.	<i>T. japonicum</i>	ヒメグモ	y	s. Ad	Ad. y	—
3 4.	<i>T. latifolium</i>	ヒロハヒメグモ	Ad	—	—	—
3 5.	<i>T. sterninotatum</i>	ムナボシヒメグモ	Ad. y	Ad	y	—
3 6.	<i>T. subadultum</i>	コケヒメグモ	y	—	—	—
3 7.	<i>T. subpallens</i>	ハイイロヒメグモ	—	—	Ad	—
3 8.	<i>T. takayense</i>	タカユヒメグモ	y	—	—	—

X Nesticidae

3 9.	<i>Nesticus brevipes</i>	コホラヒメグモ	Ad	Ad	—	—
------	--------------------------	---------	----	----	---	---

XI Linyphiidae

4 0.	<i>Arcuphanthes tamaensis</i>	タマヤミサラグモ	y	—	Ad	y
4 1.	<i>Doenitzius parvus</i>	コデーニツツサラグモ	—	—	—	Ad
4 2.	<i>Floronia bucculenta</i>	ハナサラグモ	—	—	Ad	—
4 3.	<i>Labulla contortipes</i>	アショレグモ	○	○	○	○
4 4.	<i>Linyphia oidedicata</i>	ヘリジロサラグモ	○	—	Ad	sub
4 5.	<i>Neolinypbia fusca</i>	クスミサラグモ	Ad	y	y	sub
4 6.	<i>N. japonica</i>	ツリサラグモ	Ad. y	Ad	y	—

			春	夏	秋	冬
4 7.	<i>Prolinyphia limbatinella</i>	フタスジサラグモ	—	y	Ad	—
4 8.	<i>P. longipedella</i>	アシナガサラグモ	y	Ad	—	—
4 9.	<i>P. yunohamensis</i>	ユノハマサラグモ	s Ad	y	sub	sub
5 0.	<i>Strandella quadrimaculata</i>	ヨツボシサラグモ	Ad	Ad	y	y

XII. Eriigonidae

5 1.	<i>Micrargus latitegulatus</i>	ヒロテゴマグモ	—	—	—	Ad
5 2.	<i>Oia imadatei</i>	イマダテテングヌカグモ	—	—	—	Ad

XIII. Sympy tognathidae

5 3.	<i>Conoculus lyugadinus</i>	ヨリメグモ	Ad	Ad	Ad	—
5 4.	<i>Mysmena jobi</i>	ナンブコツブグモ	Ad. y	Ad	s . y	—

XIV. Theridiosomatidae

5 5.	<i>Ogulnius agnoscus</i>	クロヤマジグモ	Ad. y	Ad	y	—
5 6.	<i>O. pullus</i>	ヤマジグモ	—	Ad	—	—

XV. Araneidae

5 7.	<i>Acusilas coccineus</i>	ハツリグモ	y . s	Ad	y	—
5 8.	<i>Araneus ishisawai</i>	イシサワオニグモ	—	—	Ad	—
5 9.	<i>A. macacus</i>	ヤエンオニグモ	—	—	y	—
6 0.	<i>A. uyemurai</i>	ヤマオニグモ	y	—	—	—
6 1.	<i>A. ventricosus</i>	オニグモ	○	○	—	—
6 2.	<i>A. lugubris</i>	コゲチャオニグモ	—	Ad	—	—
6 3.	<i>A. abscissus</i>	キザハシオニグモ	—	—	Ad	—
6 4.	<i>A. tsuno</i>	ツノオニグモ	—	—	Ad	—
6 5.	<i>A. pseudocentrodes</i>	トガリオニグモ	—	Ad	y	—
6 6.	<i>A. cucurbitinus</i>	ハナオニグモ	Ad. y	—	—	—
6 7.	<i>A. ejusmodi</i>	ヌサオニグモ	y . s	Ad	y	—
6 8.	<i>A. mitificus</i>	ヒジョオニグモ	y	Ad	Ad	—
6 9.	<i>A. pentagrammicus</i>	アオオニグモ	Ad. y	—	y	—
7 0.	<i>A. semilunaris</i>	マルヅメオニグモ	—	Ad	—	—
7 1.	<i>A. variegatus</i>	ニシキオニグモ	—	—	Ad	—
7 2.	<i>A. viperifer</i>	カラオニグモ	Ad	—	—	—
7 3.	<i>A. fuscocoloratus</i>	ヤミイロオニグモ	Ad	—	sub	—
7 4.	<i>Neoscona mellotteei</i>	ワキグロサツマノミダマシ	—	s . Ad	Ad	—
7 5.	<i>N. scylloides</i>	サツマノミダマシ	y	Ad	—	—
7 6.	<i>N. nautica</i>	イエオニグモ	—	—	Ad	—
7 7.	<i>N. scylla</i>	ヤマシロオニグモ	y	Ad	y	—

			春	夏	秋	冬
78.	<i>Hypsosinga sanguinea</i>	シロスジショウジョウグモ	Ad.y	Ad	y	—
79.	<i>Zilla astridae</i>	サガオニグモ	Ad	—	y	sub
80.	<i>Z. sachalinensis</i>	カラフトオニグモ	Ad.y	—	y	—
81.	<i>Argiope aetherea</i>	チュウガタコガネグモ	y	—	—	—
82.	<i>A. amoena</i>	コガネグモ	—	—	y	—
83.	<i>A. bruennichii</i>	ナガコガネグモ	y	y.s	Ad	—
84.	<i>A. minuta</i>	コガタコガネグモ	y	○	Ad	—
85.	<i>Chorizopes nipponicus</i>	ヤマトカナエグモ	y	—	—	—
86.	<i>Cyclosa argenteoalba</i>	ギンメッキゴミグモ	Ad.y	Ad	y	—
87.	<i>C. atrata</i>	カラスゴミグモ	—	Ad	—	—
88.	<i>C. japonica</i>	ヤマトゴミグモ	—	Ad	—	—
89.	<i>C. monticola</i>	ヤマゴミグモ	—	—	sub	—
90.	<i>C. octotuberculata</i>	ゴミグモ	sub	Ad	y	y
91.	<i>C. sedeculata</i>	ヨツデゴミグモ	Ad.y	Ad	y.s	—
92.	<i>Cyrtarachne bufo</i>	トリノフンダマシ	—	Ad	—	—
93.	<i>C. inaequalis</i>	オオトリノフンダマシ	—	Ad	—	—
94.	<i>C. nagasakiensis</i>	シロオビトリノフンダマシ	—	Ad	—	—
95.	<i>C. yunoharuensis</i>	アカイロトリノフンダマシ	—	Ad	—	—
96.	<i>Meta reticuloides</i>	ヤマジドヨウグモ	—	y.s	Ad	—
97.	<i>M. yunohamensis</i>	メガネドヨウグモ	sub	—	—	—
98.	<i>Nephila clavata</i>	ジョロウグモ	y	y	Ad	—

XVI. Tetragnathidae

99.	<i>Leucauge magnifica</i>	オオシロカネグモ	y	Ad	y	—
100.	<i>L. subblanda</i>	コシロカネグモ	y	Ad	y	—
101.	<i>L. subgemmea</i>	キララシロカネグモ	y	Ad	—	—
102.	<i>Menosira ornata</i>	キンヨウグモ	—	—	Ad	—
103.	<i>Tetragnatha praedonia</i>	アシナガグモ	—	—	—	y
104.	<i>T. squamata</i>	ウロコアシナガグモ	—	—	—	y

XVII. Urocteidae

105.	<i>Uroctea compactilis</i>	ヒラタグモ	○	○	○	○
------	----------------------------	-------	---	---	---	---

XVIII. Zodariidae

106.	<i>Doosia japonica</i>	ドウシグモ	Ad	—	—	—
------	------------------------	-------	----	---	---	---

XIX. Agelenidae

107.	<i>Agelena limbata</i>	クサグモ	y	—	—	—
------	------------------------	------	---	---	---	---

			春	夏	秋	冬
108.	<i>Agelena opulenta</i>	コクサグモ	y	○	Ad	—
109.	<i>Cicurina japonica</i>	コタナグモ	○	○	Ad	—
110.	<i>Coelotes antri</i>	ホラズミヤチグモ	—	—	—	Ad
111.	<i>C. exitialis</i>	ヤチグモ	y	—	—	—
112.	<i>C. kitazawai</i>	アズマヤチグモ	—	—	Ad	—
113.	<i>C. modestus</i>	ヤマヤチグモ	—	y . s	Ad	Ad
114.	<i>Coelotes</i> sp.	ヤチグモの一種	—	—	—	Ad
115.	<i>Cybaeus nipponicus</i>	カチドキナミハグモ	Ad	—	—	Ad
116.	<i>C. kiuchii</i>	キウチナミハグモ	—	—	—	Ad
117.	<i>C. shinkaii</i>	シンカイナミハグモ	Ad	—	—	Ad

XX. Hahniidae

118.	<i>Hahnia corticicola</i>	ハタケグモ	—	—	Ad	—
119.	<i>Antistea</i> sp.	クサチハタケグモの一種	Ad	Ad	—	—

XXI. Pisauridae

120.	<i>Dolomedes hercules</i>	スジボケハシリグモ	y	—	—	—
121.	<i>D. raptor</i>	アオグロハシリグモ	○	Ad	—	y
122.	<i>D. saganus</i>	スジアカハシリグモ	y	—	y	y
123.	<i>D. sulfureus</i>	イオウイロハシリグモ	—	Ad	y . s	—
124.	<i>Pisaura lama</i>	アズマキシダグモ	sub	Ad	Ad	y

XXII. Lycosidae

125.	<i>Arctosa ebicha</i>	エビチャコモリグモ	Ad	—	—	—
126.	<i>Pardosa laura</i>	ハリゲコモリグモ	—	Ad	sub	—
127.	<i>P. brevivulva</i>	ヤマハリゲコモリグモ	Ad	—	—	sub
128.	<i>P. astrigera</i>	ウヅキコモリグモ	○	○	○	○
129.	<i>Pirata subpiraticus</i>	キバラコモリグモ	Ad	—	—	—
130.	<i>P. exiguum</i>	コガタコモリグモ	—	Ad	—	—

XXIII. Oxyopidae

131.	<i>Oxyopes sertatus</i>	ササグモ	—	Ad	—	—
------	-------------------------	------	---	----	---	---

XXIV. Thomisidae

132.	<i>Misumenops japonicus</i>	コハナグモ	y	Ad	y	—
133.	<i>M. tricuspidatus</i>	ハナグモ	Ad	—	○	y
134.	<i>Oxyptila decorata</i>	キハダカニグモ	s Ad	Ad	y	—
135.	<i>Oxytate striatipes</i>	ワカバグモ	Ad	Ad	y	—
136.	<i>Philodromus spinitarsis</i>	キハダエビグモ	Ad	Ad	y	y . s

KISHIDAIA No.43, 1978, Jul

			春	夏	秋	冬
137.	<i>Philodromus subaureolus</i>	アサヒエビグモ	y	Ad	y	y
138.	<i>Pistius truncatus</i>	ガザミグモ	Ad	y	y	sub
139.	<i>Synaema takashimai</i>	アマギエビスグモ	Ad	Ad	y	-
140.	<i>Tibellus tenellus</i>	シャコグモ	Ad	Ad	y	y
141.	<i>Thanatus nipponicus</i>	ヤマトヤドカリグモ	-	-	Ad	-
142.	<i>Tmarus piger</i>	トラフカニグモ	Ad	-	y	y · s
143.	<i>T. rimosus</i>	セマルトラフカニグモ	y	Ad	-	-
144.	<i>Xysticus croceus</i>	ヤミイロカニグモ	y	-	y	-
145.	<i>X. sagazus</i>	オオヤミイロカニグモ	Ad	-	-	-

XXV. Salticidae

146.	<i>Boethus sexdentatus</i>	ムツバハエトリ	-	Ad	-	-
147.	<i>Carrhotus xanthogramma</i>	ネコハエトリ	Ad	y	y · s	-
148.	<i>Dendryphantes atratus</i>	カラスハエトリ	y	Ad	-	-
149.	<i>Evarcha albaria</i>	マミジロハエトリ	Ad. y	Ad	y	-
150.	<i>Harmochirus brachiatus</i>	ウデブトハエトリ	-	Ad	-	-
151.	<i>H. doenitzi</i>	デニニツハエトリ	Ad	y	Ad	-
152.	<i>Jotus difficilis</i>	マガネアサヒハエトリ	-	-	y	-
153.	<i>Laufelia aenea</i>	エキスハエトリ	Ad	-	-	-
154.	<i>Myrmarachne innermichelis</i>	ヤサアリグモ	y , s	Ad	-	-
155.	<i>M. japonica</i>	アリグモ	Ad	-	s .Ad	y
156.	<i>Pellenes ususudi</i>	ウススジハエトリ	Ad	Ad	y	sub
157.	<i>Plexippus annulipesdis</i>	マダラスジハエトリ	Ad	-	y	-
158.	<i>Silerella vittata</i>	アオオビハエトリ	-	-	Ad	-
159.	<i>Synagelides agoriformis</i>	アメイロハエトリグモ	-	-	y	-

XXVI. Clubionidae

160.	<i>Chiracanthium eutittha</i>	アシナガコマチグモ	y	Ad	Ad	-
161.	<i>C. japonicum</i>	カバキコマチグモ	y	Ad	y	-
162.	<i>Clubiona japonicola</i>	ハマキフクログモ	y	-	-	-
163.	<i>C. jucunda</i>	ヤハズフクログモ	-	Ad	y	y · s
164.	<i>C. vigil</i>	ムナアカフクログモ	-	Ad	-	y · s
165.	<i>Phrurolithus nipponicus</i>	ウラシマグモ	s .Ad	Ad	y	sub
166.	<i>P. pennatus</i>	ヤバネウラシマグモ	-	Ad	-	-
167.	<i>Itatsina praticola</i>	イタチグモ	-	Ad	-	y · s
168.	<i>Trachelas japonicus</i>	ネコグモ	-	-	Ad	-

春 夏 秋 冬

XXVII. Anyphaenidae

169.	<i>Anyphaena pugil</i>	イズツグモ	s, Ad	—	sub	sub
------	------------------------	-------	-------	---	-----	-----

XXVIII. Heteropodidae

170.	<i>Heteropoda forcipata</i>	コアシダカグモ	—	○	○	○
------	-----------------------------	---------	---	---	---	---

XXIX. Ctenidae

171.	<i>Anahita fauna</i>	シボグモ	y	—	y	y, s
------	----------------------	------	---	---	---	------

XXX. Gnaphosidae

172.	<i>Zelotes pallidipatellis</i>	マエトビケムリグモ	Ad	—	—	sub
------	--------------------------------	-----------	----	---	---	-----

173.	Gnaphosidae Gen. sp.	ワシグモ科の一種	Ad	—	—	—
------	----------------------	----------	----	---	---	---

合 計 116 99 109 57

八王子城跡において開かれた4回の採集会の結果は以上の173種であった。これらのクモの季節相の考察ならびに分類・分布・生態上の重要種については次号(44号)に発表の予定である。

全体の半分を占めた。八木沼健夫氏は Some Problems in cave Spiders という題で講演され面白躍如たるものがあった。NHKの「自然のアルバム」も氏によって上映された。 Atypus 70号にはこの大会に関する八木沼氏の詳細な記事があるので参考されたい。日本のクモ学のレベルは決して欧米にひけをとらないことは明らかと思われるが、研究結果をもっと海外にも紹介していくことが必要であろう。次回は 1980 年 7 月にオーストリーのウィーンで行なわれる予定。

編集後記

観察会報告 1977 年春巾着田での報告は鳩田順一氏よりいただきでいたのですが、今年は巾着田を一年間行なうことになり、春の分としてこの 1977 年春に有志一同で行なった今年 4 月のものをまとめ、これを持って来年の総合報告書を書くことになり、現在保留中です。ちなみに巾着田観察会は鳩田氏が総合責任者となっています。

今回は予定通り発行できそうだ、と安心しています。編集・稿正にと実行委員の田中理恵・栗原輝代子・鳩田順一各氏に御協力いただきました。皆様には原稿を書いてもらうという協力をお願いします。

本部	〒191	東京都日野市豊田 1896	萱 鳩 泉
事務局(会計受付)	〒185	東京都国分寺市本多1-6-6	新 海 栄 一
編集局(原稿受付)	〒221	横浜市神奈川区片倉町 199	熊 田 憲 一
通信用原稿受付	〒190-12	東京都西多摩郡瑞穂町武藏 41	田 中 理 恵

KISHIDAI A 16 43 1978年7月17日印刷 編集者 熊 田 憲 一
1978年7月18日印刷 発行者 萱 鳩 泉
発行所 東京蜘蛛談話会
〒191 東京都日野市豊田 1896 萱 鳩 泉

印刷所 富士工房

〒194 東京都町田市原町田 4-9-7